

真宗における「世俗化」の問題

——特に教団の現状を巡って——

合 群 信 哉

一

現代社会における宗教の状況を記述する上で、「世俗化」という言葉の使用される頻度は、特に、真宗を研究するものに限って言えば、依然として極めて高い。何よりもこれは、彼らが、「世俗化」の問題を、なおも重要な教学的課題として受けとめていることの証左であろう。

しかしながら、「世俗化」という言葉を使用する際、彼らにおいては、その概念の内容を吟味するといった基礎的な作業が、必ずしもなされておらず、しばしばその用法には、ある種の混乱が認められる。小論は、その様に、ともすれば不用意に使用されがちな「世俗化」という言葉について、その概念の再確認を一つの目的とする。更には、そうした予備的な作業をもとに、「世俗化」の問題は、今日の真宗にとって如何なる意味をもつのか、我々はこれをどう受けとめ、如何

なる姿勢を取り得るかを、特に教団の問題との関連で明らかにするものである。

二

ところで、西欧における世俗化の概念の由来やその意味の変遷などについては、既に多くの研究が公表されているので、改めて繰り返す必要もなからう。ここでは、差し当たり、宗教社会学における成果についてのみ、その概念を跡づけておくことにする。

一九六〇年代後半から七〇年代全般にかけて、主に宗教社会学の領域においては、「世俗化」を巡る論議・論争が、その中心的位置を占め、結果として、その概念についての新説が続々と登場した。ここでは、田丸徳善の説に倣って、その様々な世俗化論を、大凡三つのパターンに分類し、図式的に整理してみることにしよう。

先ずは、宗教衰退論であるが、これは、現代社会において宗教の機能が、次第に他の機構によって代わられてゆくと思積するもの、または、非宗教化してゆく傾向を指すものであり、B・ウィルソンの初期の業績などは、その典型的なものといつてよからう。

この宗教衰退論に対して、現代において伝統的な宗教は、大きな変動にまきこまれていく事実は認めるとしても、それは必ずしも非宗教化ないし衰退ではなく、むしろ、本質的に変動の過程であつて、宗教そのものは消え去ることはないとする立場が、宗教不滅論であり、これは更に二つの下位類型、即ち、機能的代替論と構造的変容論（個人化論）に分けられる。前者は、伝統的な宗教の果たしていた正当化と統合の機能が、何等かの公的な価値によって代替されるとの見解であり、R・ベラーの国家的象徴体系としての「市民宗教」（Civil religion）の概念などは、これに相当する。後者については、宗教が、主として私的な意味体系としてその役割を保持し続ける、つまり、「私の領域」の現象として機能することになるとの見解であり、この主張の代表が、T・ルックマンである。

さて、右の三説はいずれも、近代西欧の歴史において、経験的にも十分に意味のある極めて重要なプロセスを表現している。そして、それらは何よりも西欧の伝統的な宗教形態、

即ち教会中心の宗教に対する根底的な問いなおしが、出発点となつてゐる。それ故、キリスト教文化においては、どの説を支持するとしても、ある意味でそれらは、正機能的であるといえよう。ところが、それらを日本の宗教における変動に適用することが可能であるか、ということになると、新たに考慮すべき問題が生じてくる。その点に関して田丸は、いみじくも「日本の宗教には世俗化（伝統的な宗教の変容）が認められるが、それは世俗化（西欧キリスト教の場合と同じ仕方での）とは言えない。」と指摘する。この逆説的な表現の中に窺えることは、世俗化概念には、キリスト教文化における固有の現象という特殊性と、他の文化にも適用されうる普遍性という独特の二面性があるということである。

小論においては、当面の目的の為に、世俗化を普遍的な現象として捉え、更に、西欧と共通の指標を設定する為に、敢えてそれを、教団宗教の衰退化と定義しておくことにする。

三

世俗化が教団宗教の衰退化を意味することは、いずれの世俗化論においても共通項である。いわば、現代の世俗社会とは、教団を必要としない社会であり、それは都市化等による、家の宗教から個人の宗教への推移を意味する。改めて指

摘するまでもないが、今日の真宗教団は、他の伝統的仏教々団と同様、死者儀礼が教団存続の柱となっており、家の宗教をその主な構成原理としている。従って、昨今の家や同族の衰退化傾向は、当然のことながら、人々の教団離れに益々拍車をかけると考えられ、それはまさに個人宗教への傾向を示唆するものといえよう。

もっとも、世俗化は宗教の個人化を意味するという考え方に立つことは、宗教は最終的に個人における問題であるという確信、「親鸞一人がためなりけり」という実存的な主体の確立を意味しないわけではなく、その点、そうした立場も評価できる。だが、C・グロックが指摘する、宗教が本来的に持つ二つの機能、即ち秩序維持・安定（コンフォート）の機能と秩序挑戦（チャレンジ）の機能の内、個人宗教は、チャレンジという側面が弱く、ややもすると自分に都合のよい宗教、教養だけの宗教という傾向にあることは否めない。

ところで、「教団」というものは、本来、宗教の二つの機能を兼ね備えながらも、むしろ社会を相対化し、世俗的価値を厳しく告発するチャレンジの機能が主軸になるべきであり、親鸞の原始教団（念仏教団）といわれるものは、その様であったと考えられる。念仏教団は、念仏の信心を共通の出発とし、十方衆生の救済と解放をめざす、純粹信仰の同信共同体であった。彼らは、常に世俗的価値を拒否ないし批判し

続け、度かさなる念仏弾圧にも、決してそれに屈することなく、ひたすら念仏を喜び、浄土を志向して生きたのである。だが、この様な立場から出発した念仏教団も、親鸞没後の長い教団の歴史の中で、その本質が次第に見失われてゆき、それと同時に、チャレンジの機能も徐々に衰退していったのである。殊に、昨今の真宗教団においては、この様な傾向が益々増大し、まさに危機的状況を呈していることは明らかである。

いずれにせよ、宗教の個人化という現象は、現在の真宗教団に対する真っ向からの挑戦に他ならず、教団自身とすれば、当然それと対決し、克服してゆかねばなるまい。だが、その対決をより具体的なものとする為には、却ってこの世俗化が提出する問題を真摯に受けとめ、教団の自己批判・体質改善を促す根本契機として捉えねばなるまい。そして、その世俗化問題を媒介する営為によってこそ、始めて、宗教の個人化を止揚し得る、理想的な教団像へのスペースクティブも開かれてくるのではなからうか。

1 田丸徳善「世俗化の問題―その予備的分析―」(『C I S R 東京会議紀要』p. 61) 参照。

2 田丸徳善「世俗化概念の妥当性」(『東洋学術研究』26:1) p. 89. 参照。

△キーワード▽ 世俗化、真宗教団、宗教の個人化

(龍谷大学大学院)